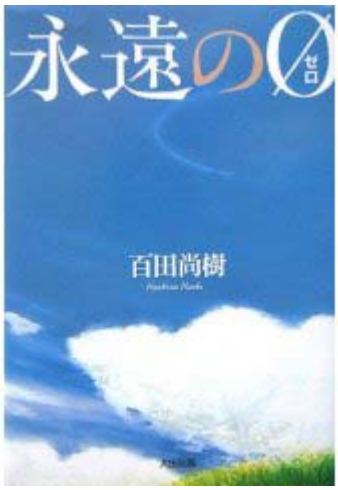
書評



永遠の０（ゼロ）　　太田出版　　百田尚樹　著

出版社/著者からの内容紹介

「生きて妻のもとへ帰る」

日本軍敗色濃厚ななか、生への執着を臆面もなく口にし、仲間から「卑怯者」とさげすまれたゼロ戦パイロットがいた……。人生の目標を失いかけていた青年・佐伯健太郎とフリーライターの姉・慶子は、太平洋戦争で戦死した祖父・宮部久蔵のことを調べ始める。祖父の話は特攻で死んだこと以外何も残されていなかった。

　元戦友たちの証言から浮かび上がってきた宮部久蔵の姿は健太郎たちの予想もしないものだった。凄腕を持ちながら、同時に異常なまでに死を恐れ、生に執着する戦闘機乗り---それが祖父だった。「生きて帰る」という妻との約束にこだわり続けた男は、なぜ特攻に志願したのか？　健太郎と慶子はついに六十年の長きにわたって封印されていた驚愕の事実にたどりつく。

はるかなる時を超えて結実した過酷にして清冽なる愛の物語！

トーマス書評

　自分たちの本当の祖父がどんなひとであったのか、孫たちがそれを探る物語である。はじめは、特攻隊員として死んだ祖父のことを「臆病者」呼ばわりされ、うちひしがれる孫たちであったが、調べが進むにしたがって意外な事実が浮かび上がる。

　祖父、宮部は、天才的な操縦技術を持ちながら、「妻と娘のために生きて帰る」という信念を持ったひとであった。当時の「死ぬのが当たり前」という戦争の狂気の中で、冷静に信念をつらぬいた宮部。そのためにまわりから反感も買う。それにもかかわらず、彼は何故、終戦まぎわに、特攻隊の一員として南洋の空に散ったのか？その真実を知った孫は…。感動という言葉だけでは言いつくせない珠玉の一冊である。

　宮部の清々しさとの対象で、いかに旧日本軍の幹部たちが愚かであったかが際立つ。自分達の体面や出世だけを第一に置くという点では、現在の官僚や政治家に重なっている。彼らの愚かさ

のために、いたずらに多くの若者が死んでいった。恐ろしいのは、過去に日本を破滅に導いた構造と同じものが現在の日本にもあるという事実である。

最後に本書でも登場するが、真珠湾攻撃にまつわる外務官僚のいいかげんさには、いまもって腹わたが煮え繰り返る。

アメリカで生活していた頃、サンフランシスコ近郊の町に出かけると、ニップ（nip: nipponese の略で、jap: japanese よりも蔑んだ日本人の呼称）と憎々しげに呼ばれたことがある。アメリカ人の友人は「気にするな」と言って、その場を離れた。たびたび、こういう経験にあったが、最初はその理由が分からなかった。その後、真珠湾攻撃のために、日本人は卑怯者だと恨みを持っているアメリカ人がいることを知った。日本は宣戦布告もせずに、戦争を開始し、奇襲攻撃のために、多くの前途有望なアメリカの若者が死んでしまった。これが彼らの不興を買っているのだ。

いまだに、アメリカでは 9.11 の世界貿易センタービルのテロを真珠湾攻撃と同じものとみなす風潮がある。加害者は忘れても、被害者はいつまでも忘れないということであろう。しかし、結果的に日本が奇襲攻撃をしたことになってしまったが、その背景には官僚の驚くべき怠慢があった。

アメリカ人の多くは、真珠湾攻撃は宣戦布告を伴わない奇襲攻撃と認識している。実際には、外務省が暗号で送った命令書では攻撃開始 30 分前の宣戦布告を予定していた。しかし、東京から宣戦布告の電文が送信された際、日本大使館員全員が、大使館を空にして同僚の送別会を行っていたため、攻撃開始時刻に宣戦布告が間に合わなかった。

1994 年 11 月 20 日、外務省は当時の調査委員会による調査記録「昭和 16 年 12 月 7 日対米覚書伝達遅延事情に関する記録」を公開し、公式見解として、大使館書記官の不手際により、宣戦布告が遅れたことを認めている。

宣戦布告が遅れたことにより、真珠湾攻撃は日本軍によるアメリカに対する騙まし討ちとみなされ、多くのアメリカ人は日本人が卑怯者であるという先入観を持っている。さらには、原爆投下の正当性の訴えにも悪用されている。

わたしがアメリカにいたのは 1970 年代である。真珠湾攻撃の背景に、このような官僚の失態があるとは知る由もなかった。その後、外務官僚は誰も責任をとることはなかった。それどころか、戦後に、この真の戦犯たちは外務省で出世し、次官まで登りつめたものもいる。官僚の無責任体質はいまにはじまったことではないのである。